

# 読む医療 専門医が語る現代病気事情

## 前立腺がんは自分に合った治療法を

前立腺癌とは、前立腺の外腺に発生するがんで、近年急増傾向にあります。近い将来、男性癌死亡者の多くの原因となることが予想されていますが、比較的ゆっくり進行することが多く、適切な治療を行えば、普段通りに長く生活を送ることが可能です。発症は、50歳以降から高齢になるにしたがって増加していきます。

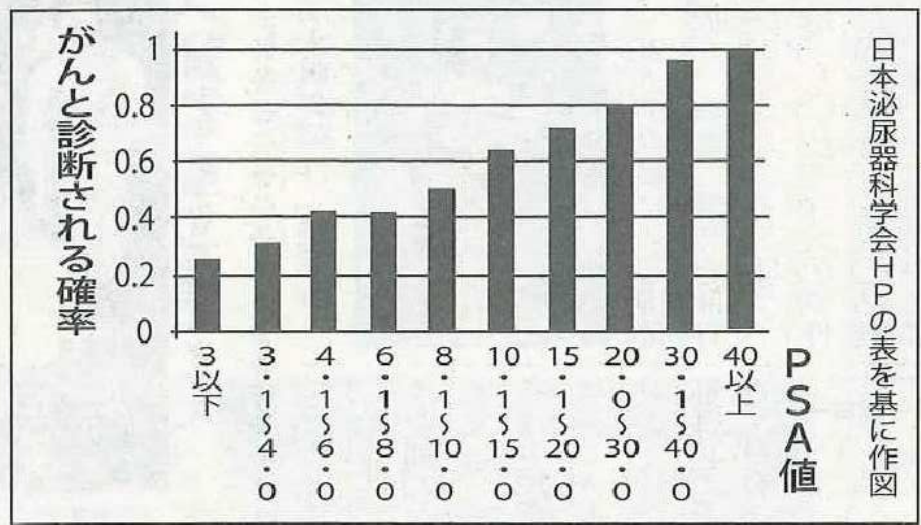
初期は無症状ですが、がんが進行すると排尿障害を来します。排尿障害は前立腺肥大のある高齢者ではよくみられるため、進行したがんを見逃してしまう場合があります。その点、注

◇執筆者紹介 宮下正夫 / 日本医科大学消化器外科教授 / 日本医科大学千葉北総病院外科部長 医学博士 / 日本消化器外科学会指導医 / 日本消化器病学会指導医 /



日本がん治療認定医機構認定医 / 日本消化管学会胃腸科指導医。

## 適切な治療で普段通りに生活



意が必要です。また、骨盤や腰椎などの骨に転移しやすいのが特徴で、多くの場合、痛みを伴います。

早期診断の第一歩は採血による「前立腺特異抗原 (PSA)」の測定です。この検査は検診に組み込まれていることもあります。PSA基準値は、0 ~ 4 ng/mLで、高い数値ほど前立腺がんがみつかります。また、100 ng/mL以上の場合には転移を疑います。前立腺がんが疑われたら、確定診断のために生検

## 悪性度・リスク・病期・年齢などに応じて判断を

が必要です。これは、超音波で前立腺の状態を確認しながら細い針を刺して、10 ~ 20か所から小さな組織を採取し、顕微鏡検査でがん細胞の有無と悪性度を調べる方法です。診断が確定したら、今度は進行度を知るために、CT検査、MRI検査、骨シンチグラフィなどが行われます。

前立腺がんの治療法の主体は、手術、放射線療法、ホルモン療法です。また、治療を行わないで経過観察だけするPSA監視療法というものもあり、前立腺がんの特性を考慮したユニークな考え方といえるでしょう。

治療法を決めるポイントは、PSA値と悪性度、病期診断に基づくリスク分類 (超低リスクから超高リスクまで)、年齢と期待余命 (どのくらい生きられるかという見直し) などです。それぞれのリスクに応じて標準的な治療法がありますが、自分にもっとも合った治療法を考えるのが前立腺がんの場合は特に重要でしょう。